

下肢静脈瘤に伴う不定愁訴に対する桂枝茯苓丸の効果

— 瘀血との関連性についての検討を含めて —

済生会横浜市東部病院 外科(血管外科) 副部長 林 忍

キーワード

- 下肢静脈瘤
- 桂枝茯苓丸
- 瘀血

下肢静脈瘤の患者は下肢の倦怠感、しびれ、冷え、痛み、痒痒感などの様々な症状を訴えることが多い。今回、下肢静脈瘤に伴う不定愁訴に対する桂枝茯苓丸の臨床的有用性を検討した。その結果、12週間の桂枝茯苓丸投与により、患者の自覚症状スコアが低下するとともに静脈瘤の重症度、瘀血スコア、皮膚灌流圧の改善がみられた。さらに下肢静脈瘤と瘀血の関連性も見出され、下肢静脈瘤患者に対する桂枝茯苓丸の臨床的有用性が示唆された。

はじめに

下肢静脈瘤は、静脈弁の不全が起こることにより表在静脈に逆流をきたす疾患である。患者は女性に多く、自覚症状として下肢の倦怠感、しびれ、冷え、痛み、痒痒感などを伴うことも多い。下肢静脈瘤の治療は、静脈剥去術(ストリッピング手術)、カテーテル静脈焼灼術(レーザー治療)、硬化療法等がある。当科では下肢静脈瘤に対してこれらの治療を積極的に行っているが、患者数が非常に多いため、治療までの待機期間が長く、その間の患者QOL管理が課題となってきた。

当科では以前より、下肢静脈瘤の患者に対して瘀血(微小循環障害)の代表的な治療薬である桂枝茯苓丸を投与し症状が緩和されることを経験しており、医療用弾性ストッキングによる圧迫療法に併行して行っている。

今回、下肢静脈瘤に伴う不定愁訴(倦怠感、しびれ、冷え、痛み、痒痒感)に対する桂枝茯苓丸の臨床的有用性を検討した。更に下肢静脈瘤患者に対する駆瘀血剤としての有用性を明らかにするため、瘀血と下肢静脈瘤の関連性についての検討も加えた。

対象と方法

2011年1月から2011年10月の間に外来受診した200例の下肢静脈瘤の患者のうち、下記の選択基準①～④を満たす14例を対象とした。

- ①不定愁訴(倦怠感、しびれ、冷え、痛み、痒痒感)を伴う
- ②静脈瘤重症度(CEAP分類(表1))3以上
- ③桂枝茯苓丸を12週間連続投与可能である
- ④他の漢方製剤を服用していない

静脈瘤の診断はすべて超音波検査で行い、患者の同意を得た上でクラシエ桂枝茯苓丸料エキス細粒(KB-25、6.0g/日・分2)の投与を開始した。投与期間は12週間とした。治療前後で自覚症状(倦怠感、しびれ、冷え、痛み、痒痒感)VAS(Visual Analogue Scale)、静脈瘤重

表1 CEAP分類(臨床徴候)¹⁾

class	臨床徴候
C0	肉眼的な静脈瘤所見なし
C1	毛細血管拡張(径1mm以下)、あるいは網目状静脈瘤(径3mm以下)
C2	静脈瘤(径3mm以上)
C3	皮膚病変を伴わない浮腫
C4	皮膚病変(脂肪皮膚硬化症、色素沈着、湿疹)
C5	潰瘍の既往
C6	活動性(現存の)潰瘍

症度、瘀血スコア(寺澤らのスコアを改変したもの)、凝固系臨床検査(PT-INR、APTT、FDP、D-dimer)、皮膚灌流圧(足底部、足背部)を観察した。併用薬については、桂枝茯苓丸以外の漢方製剤は使用不可とした。抗凝固薬・抗血小板薬は原則併用不可としたが、やむを得ず併用した場合は、投与前後で用法・用量を含め変更しないこととした。なお、全例で弾性ストッキングによる圧迫療法を併用した。

結果

1. 患者背景

患者背景を表2に示した。

表2 患者背景

項目	症例数	項目	症例数	
年齢	39~88(62.8±13.0)歳	合併症 (重複あり)	高血圧	6
性別	男性		3	脂質異常症
	女性	11	脂質異常症治療薬	4
BMI	20.1~27.8 (24.2±2.3)	併用薬 (重複あり)	降圧薬	6
			抗血小板薬	1
静脈瘤発症	3~33(17.4±9.9)年前		排尿障害治療薬	1
			抗不安薬	1

n=14, mean±S.D.

2. 自覚症状VAS

自覚症状のVASは、倦怠感、しびれ、冷え、痛み、痒痒感の合計に有意(p<0.01)な改善を認めた。各症状別ではしびれ(p<0.05)、冷え(p<0.01)、痒痒感(p<0.01)に、それぞれ有意な改善が認められた(図1)。

図1 自覚症状VAS

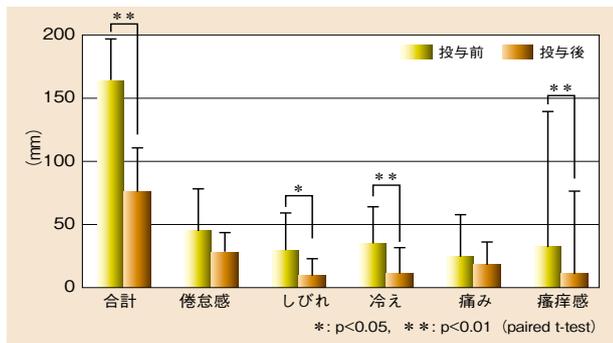
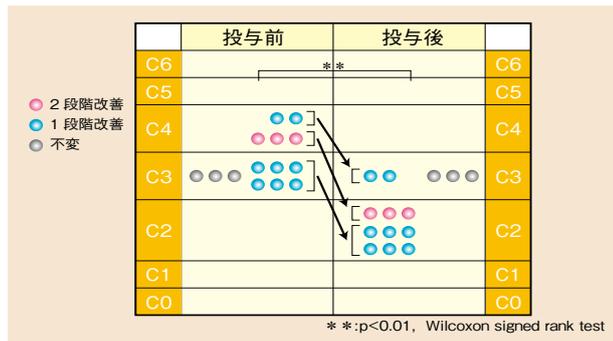


図2 静脈瘤重症度



3. 静脈瘤重症度

静脈瘤重症度の改善は、11例(78.6%)に認められ、うち3例(21.4%)が2段階の改善であった。全体で投与前後において有意(p<0.01)な改善を認めた(図2)。

4. 瘀血スコア

瘀血スコアは全体で有意(p<0.001)な改善を認めた(図3)。

5. 凝固系臨床検査

PT-INRが 投与前0.9±0.0、投与後1.0±0.0 と推移し、有意(p<0.05)な上昇を認めたが、正常範囲内での変動であった。他の検査では有意な変化が認められなかった。

6. 皮膚灌流圧

皮膚灌流圧は有意に上昇した(図4)。

7. 瘀血スコアの改善と自覚症状の改善の相関性

桂枝茯苓丸による瘀血スコアの改善と自覚症状の改善の相関性を検討した。瘀血スコアの改善と自覚症状VASの改善は有意な相関性を示した(r=0.883, p<0.001)(図5)。

8. 副作用・全般改善度

副作用と思われる事象は認められなかった。血圧・脈拍も投与前後で有意な変動を認めなかった。全般改善度は自覚症状および静脈瘤重症度の改善を重視して行った。著明改善3例、改善8例、やや改善3例であり、改善度は改善以上で78.6%であった。

図3 瘀血スコア

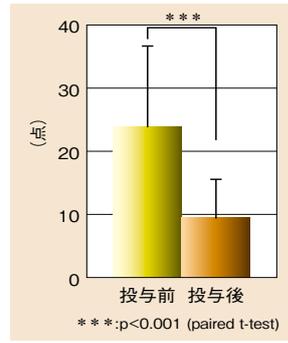


図4 皮膚灌流圧

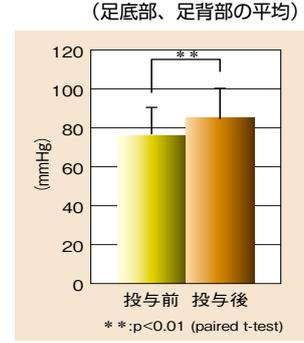
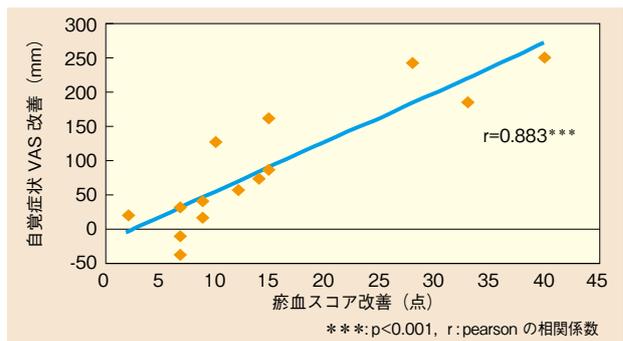


図5 相関性(瘀血スコア改善—自覚症状VAS(合計)改善)



今回の検討では、桂枝茯苓丸投与により、下肢静脈瘤に伴う不定愁訴に改善を認めた。桂枝茯苓丸投与後において皮膚灌流圧が有意に上昇したことから、これらの自覚症状の改善は桂枝茯苓丸の末梢血流量増加作用(微小循環改善作用)による可能性が考えられる。桂枝茯苓丸はこれまでにその作用として血液粘度の低下^{2,4)}、血小板凝集抑制⁴⁾、赤血球変形能の亢進⁵⁾などが報告されており、これらの薬理作用が桂枝茯苓丸の末梢血流量増加作用に寄与したと推察できる。

今回の検討において、自覚症状の改善が瘀血スコアの改善と有意な相関を示したことから、下肢静脈瘤に伴う自覚症状に対する瘀血の関与が示され、下肢静脈瘤患者の不定愁訴に対する桂枝茯苓丸の有用性が示唆された。さらに静脈瘤重症度でも改善を認めたことから、桂枝茯苓丸は自覚症状改善だけでなく、下肢静脈瘤という疾患そのものに対しても有効である可能性がある。

下肢静脈瘤における漢方治療の有用性は、患者の自覚症状の改善による満足度の高さにあるとの感触を持っている。一般に下肢静脈瘤の治療は軽症では弾性ストッキングによる圧迫療法、中等症から重症では外科的療法が施行される。しかし今回の検討においては、静脈瘤重症度に関わらず自覚症状の改善を認めたことから、何らかの症状を訴える患者に対し桂枝茯苓丸を投与することは有用であると考えられる。

考 察

下肢静脈瘤患者に伴う下肢の倦怠感、しびれ、冷え、痛み、痒痒感などの症状は患者のQOLを損なう。また下肢静脈瘤の病態は漢方医学的には静脈系の瘀血と解釈できる。

【参考文献】

- 1) Eklof B, et al : J Vasc Surg. 40 : p1248-1252, 2004.
- 2) T Itoh, et al : 和漢医薬学会誌 9 : p40-46, 1992.
- 3) H Tosa, et al : 和漢医薬学会誌 6 : p13-19, 1989.
- 4) H Tosa, et al : 和漢医薬学会誌 4 : p172-179, 1987.
- 5) H Hikiami, et al : Phytomedicine 10 : p459-466, 2003.